

## 熊本県におけるヒノキカワモグリガの分布と被害歴

熊本県林業研究指導所 久保園 正 昭  
林業試験場九州支場 倉 永 善太郎

## 1. はじめに

ヒノキカワモグリガは1957年長野県下ではじめ確認された森林害虫であるが、ヒノキを加害していたためこの和名が与えられた。

その後全国各地のスギ造林地での被害が報告されている。本県では1980年小国地方でスギを加害しているのを確認したのははじめてであるが、今回県内における被害実態(分布)調査を行ったので、その概要を報告する。

## 2. 方 法

県内のスギ造林地を無作為に選んで、肉眼により樹脂の流出、虫糞やこぶ状隆起の有無、幼虫の寄生等により被害の有無を判断し、5万分の1地形図にプロットした。対象林分の林令、品種、植栽密度、方位、保育状況等を記録した。

また、当害虫による被害実態をチェックするため天草地方の被害林分(メアサ系、林令19年)から3本を選んで伐倒、割材し各年次ごとおよび地上高ごとの食痕数を調査した。

## 3. 結 果

## (1) 被害の分布と特徴

その結果は図-1のとおりで674個所の調査林分中226林分に被害を確認した。

県北地域では被害林が多く、ことに大分、福岡両県境に近い地域に激害林が多くみられた。

県中央部では被害は全域にわたって散在しており、激害林は比較的少なかった。

県南地域でも全域にわたって分布しているが激害林は少なく、スギ造林地の多い内陸部での被害が比較的少なかった。

天草地域では被害林は少なく、下島の中央部に局部的に認められるにすぎない。

以上のように当害虫の被害は県内スギ造林地のはば

全域にわたって分布していることが今回の調査により判明した。

つきに被害の特徴をみると、樹種別には大半がスギであり、ヒノキには少なく、軽微な被害が多く、加害痕も目立たない。

スギを品種別にみると、被害にかなりの差があることをさきに報告したが<sup>1)</sup>、今回の調査においてもアヤスギ系品種に被害が多い傾向がみられた。

被害は5~6年生の幼令木から老令木までみられ、加害部位は地際近くから梢頭部までの主幹および枝条部におよび、比較的枝の基部付近に多い。

標高では低海拔地域での被害は少なく、400m以上になると発生が多くみられるようになる。

## (2) 食痕と被害歴

食痕から推定した各年次ごとの加害痕数は図-2のとおりで、加害は1974年からはじまり1979年から急に増加しはじめ、以後5カ年間の食痕数が多かった。

つきに地上高別食痕数は図-3のとおりで、供試木の個体差、年次別の差がみられるものの、地際から6mの高さまでまんべんなく分布しており既報の調査例<sup>2)</sup>と同様の傾向がみられた。

## 4. 考 察

1) 熊本県のスギ造林地を対象に、ヒノキカワモグリガの被害実態調査を行ったところ、県内のはば全域に分布していることが判明した。

2) 分布は地域により差がみられるが、スギの品種によっても被害に差がみられ、アヤスギ系に多い傾向がみられた。

低海拔地域には被害が少なく、400m以上になると発生し、特に標高500~700mの範囲に多くみられた。

3) 被害歴を明らかにするための被害木調査で食痕数から推定すると加害は11年前からはじまり特に2~5年前が多く、地上高別の食痕数は地際から6mの高さまでまんべんなく認められた。

Masaaki KUBOZONO (For. Res. and Instruc. Stn. of Kumamoto Pref., Kumamoto 860) and Zentarou KURANAGA (Kyushu Br. For. and Forest Prod. Res. Inst., Kumamoto 860)  
Distribution and damage history of *Epinotia granitalis* in Kumamoto Prefecture

4) 当害虫の発生と環境、林分の植栽密度および保育との関係についての調査を進める必要があるように思われる。

引用文献

- (1) 倉永善太郎：日林九支研論, 38, 217~218, 1985
- (2) 倉永善太郎：———, 38, 215~216, 1985

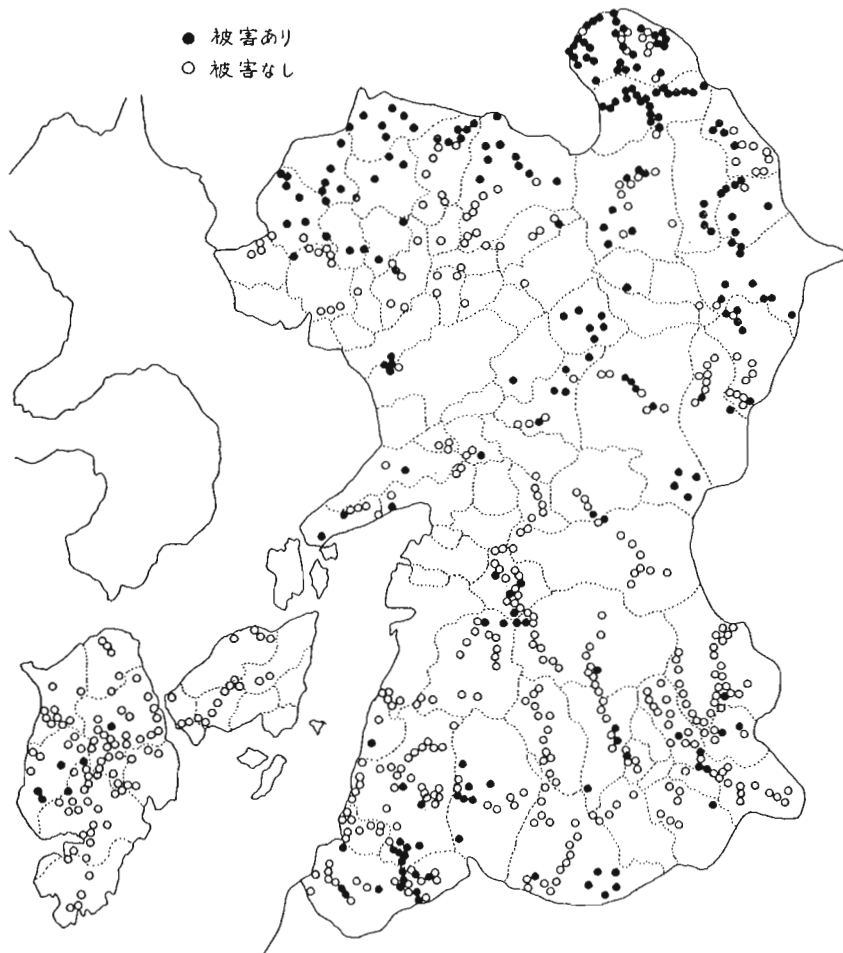


図-1 被害の分布

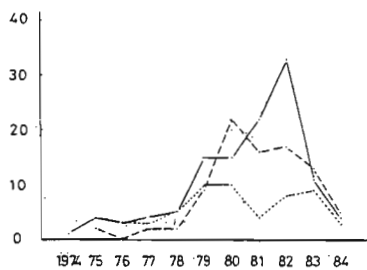


図-2 被害歴

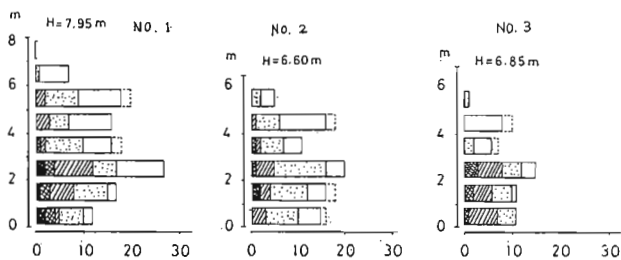


図-3 部位別食痕数